

四畳半ひと間の夏

江口ともみ タレント

渋谷に生まれてずっと東京育ちの私にとって、「電気」はあつて当たり前。灯りもそうだけど、むしろたくさんさんの家電製品——コンセントにつながるだけで暮らしを便利してくれる働き者の動力、という印象が強い。

一〇年前、坂の多い街に越してきて、コンセントにはもう一つ、つながりようになった。そう電動自転車。山ほどの買い物をしても、坂道を楽々上れる頼もしい私の足として、日々活躍してくれている。

日本にいと電気は身近な存在だが、海外取材でカルチャーショックを受けることも多い。新興国の経済の中心として活気溢れるインドのムンバイから車で二時間半。村長さんの家にだけ慎重しやかに灯りが点っている以外、電気のない村を訪れたときは、その暗さに驚いた。目が慣れないうちは、夜道を歩く大勢の村人がいることにさえ気づかなかったほどだ。でも、アメリカ・オクラホマの牧場地帯、プエルトリコの山岳地帯——どこも結構暗く、便利さも半ばくらしい暮らしのように感じた。

そんな国での取材を終えて帰国して、「ああ日本に帰ってきた」と実感するのは、レインボーブリッジを渡るとき。橋を彩るイルミネーション、対岸の高層ビルの灯り、色とりどりのネオンサイン。このカラフルさが日本だ、私の暮らしはこんなにも豊かに潤っているんだと、つくづく思う。

現代日本人が電気を改めて意識したのは、やっぱり東日本大震災の時だろう。東京でも計画停電、節電と続き、わが家も節電に協力

でんき * STORY

した。実はわが家は四層の建物で、夏になると家の中に四季ができる。地下はひんやり涼しい秋、一階が春、二階が夏、最上階は猛暑の真夏。上の階で過ごすのは暑過ぎるし、あちこちの階を使うと非効率。というわけで、地下は老犬に譲り、私たち夫婦は一階の四畳半の和室だけで暮らすことにした。エアコンを切り、使うのは扇風機と団扇だけにしようと。食事は二階のキッチンで汗だくになってつくったものを一階に運んで、卓袱台でいただく。四畳半ひと間の暮らしは、それはそれで楽しかったけど、実際はウォーターサーバーや大画面テレビも使ってしまったので、さほど節電にはならなかった。

震災以降、安全・安心が一番という声をよく聞くが、電気をきちんと届けてもらうことこそ大事ではないか。家庭ではそれなりに節電を楽しめても、きつと工場の現場など企業にとって電力不足は大変だろう。それによって企業が元気をなくしたり、日本が貧乏になってしまうのも困る。私たち自身、ムダに電気を使うことは改めるとして、やっぱり電力会社は安く安定して電気を届けてもらいたい。

さあ七月、わが家にとって四畳半ひと間で過ごす夏がやってきた。今年はずっと上手に電気とつきあおう。そう秘かに闘志を燃やしている。 **躍**



えぐち ともみ タレント
1968年東京都生まれ。東洋英和女学院短期大学卒。バラエティ番組を中心にナレーターや司会業で活躍。「ビートたけしのTVタックル」「別冊アサ秘ジャーナル」「大改造!! 劇的ビフォーアフター」などでレギュラーを務めるほか、ドラマにも出演。また「日経ビジネスonline」で企業訪問コーナーを担当、インタビュアーを務める。
<http://ameblo.jp/momirobi/>

